

第10回 横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録	
議題	(1) 今後の都市デザイン行政について ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて(審議)
日時	平成26年12月4日(木) 午前10時00分から午前12時00分まで
開催場所	横浜市開港記念会館 7号室
出席者(敬称略)	委員: 西村幸夫(部会長)、佐々木葉、六川勝仁、国吉直行 書記: 小山孝篤(都市整備局企画部長)、綱河功(都市整備局都市デザイン室長) 事務局(資料説明者): 野田恒雄(都市整備局都市デザイン室)
欠席者(敬称略)	中津秀之
開催形態	公開(傍聴者1名)
決定事項	・「ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて」は、審議会からの意見をふまえて作成を進めるものとし、市民意見募集実施後に再度審議を行う。
議 事	<p>議 事</p> <p>(1) 今後の都市デザイン行政について ア (仮称) 横浜都市デザインビジョンについて (審議)</p> <p>市から資料1に基づいて説明を行った。</p> <p>○国吉委員 「都市デザイン」にかかわる側面を全部出しているように見え、一般解になりつつあると感じる。横浜ならではの固有のものがあまり見えていないのではないかと。どこかに力点を置かないと、わからなくなるのではないかと。「先導」と「舵取り」はどう違うのか、舵取りするのは専門家なのか、官民なのかなど、全部入れてしまったがゆえに、どの辺に本当にウエートがあるのかが見えない感じがする。もうちょっと少ないものを出していったほうが当面の目標としてわかりやすいのではないかと。全体としてもうちょっと狭いタームで言ったほうがわかるのではないかと。</p> <p>○六川委員 今と共通して、戦略や戦術もいろいろと紹介しているが、そこまでしなくてもいいのではないかと。それから、市民がもっとわかりやすくなければいけないと思うが、これは長過ぎて読み切れないかなと思う。前回の議事録にも出ているが、市民と行政の信頼関係を促進するような役割は都市デザイン室にある。例えばワンストップの相談窓口を都市デザイン室がやるなど、市民から見てもっとわかりやすくブレークダウンした部分があってもいいと思う。</p> <p>それと、前回審議会でも「有機」という言葉について議論があった。わかりにくい言葉はなるべくやめましょうという話があったと思うが、その辺はどうなっているのか。</p> <p>また、例えば歴史的な建造物がどんどん壊されている現状がある。横浜市の都市デザイン室が主導して歴史的景観保全委員会というのをつくっていても訴求の力がなくて壊されている。確かに都市デザインビジョンは今後の長い展望のため、プラス部分だけでもいいが、そういう発想もふまえてつくったらどうか。</p> <p>サッカーのフォーメーションについては絶対やめたほうがいいと思う。サッカーがわからない人が多いわけで、もっとシンプルにした方がいいのではないかと。</p> <p>○佐々木委員 これ(都市デザインビジョン)は大学の教科書にちょうど良いと思う。これを本当に市民が読み切るかということに関しては、いろいろと問題があるのかもしれないが、これぐらいヘビーなものがあっても、市民でも関心のある人は読めると思う。これをつくっておくことは全く問題ではない。ちょっとゼネラルという意味でも大学の教科書にすぐよく使えるという感じで、その割にはコンパクトにまとまっていてとても良いと思う。これの後に、それこそワンストップとか、何かここだけは特化していくとかというのがあってもいいのかなという印象。</p> <p>○西村部会長 それと関連して、デザインビジョンをつくった後、都市デザイン室なら何をするかみたいなものは別のものできてるのか。これ全体の位置づけはどうなっているのか。</p>

か。

○綱河書記 これ（都市デザインビジョン）は全体の市民や多くの人に向けて、みんなの活動がこういうふうにつながっていきます、それをつないで全体をつくり上げていきますなどという話になっている。我々は行政の中でも専門部署でもあるので、その役割はまたちよつと違ったところもあるとは思う。実験的なことなどを仕掛けていったりするなどの役割があると思うので、都市デザイン室としてどんな手を打っていくのかというところは別途つくるつもりでいる。ただ、それを市民に向けてこういう印刷して発行するスタイルでつくるかなどは決まった話ではない。

○西村部会長 公にするような形にならないということか。

○綱河書記 その時々でいろいろなプロジェクトがあり、そこにどう突っ込んでいくかといったことが含まれてくるので、印刷物として、長い間使うようなものとしてつくるのは不適當かと思う。どういうふうにつくろうかというのは、検討中である。

○国吉委員 都市デザイン活動とはどういうことなのだとすることを掘り下げているわけだが、そういうことを市民に伝えることがどれだけ重要かどうか。それよりも、都市デザイン活動としてこういうことをやっていきます、当面この辺にウエートを置いていきます、こういうことを実現していきたいですというようなことが市民としてわかりやすいのではないか。（都市デザインビジョンに）書いてある内容は良いが、その辺の打ち出し方の意味などを検討したほうが良い。

○西村部会長 なぜ今の時期にこれが出てくるのか、つまり都市デザイン室の置かれた立場がここに明確にあらわれている。みんなの中のある種カタリストみたいな感じで、現場があったら行くと言っても、その現場は今ここだというのは明記していないという感じ。

○綱河書記 都市デザイン室としてどういう具体的な行動をするかというのは、今後出していくつもりである。横浜は都市デザインの先進都市というように見られ、その成果も出してきたが、そののエッセンスをもう一度きちんと言葉に置きかえていくようにしている。

今、局内でいろいろな人と（都市デザインビジョンについて）議論している中では、「そういうことだったら自分のまちづくり、自分の担当している地域の資源を使えるね」などの反応がある。我々はこんな都市デザインを今まで展開してきた、これからこんな価値を大事にしていくということ共有するのは、都市デザインにつながってくるいろいろなプロジェクト・まちづくりが活発化していく上では重要なと感じる。こういったほかのところにも思想を広げていくようなことを一緒にやっていく必要があり、都市デザイン室は特に行動しないということではない。

○西村部会長 都市デザイン室は、具体的にプロジェクトを描くなど、何か創造性を体現している1つのモデルとして頑張っている部分もあっていいのではないかと。

○佐々木委員 これ（都市デザインビジョン）は市民に直接読んでもらってわかりやすいものということよりも、都市デザイン室としてのステートメントとなるもの。市の他の部局に対してとか、あるいは民間の企業、どんどん開発していこうとしているデベロッパーさんとかに対して、「いや、横浜というのはこういうスタンスでやっているのだから、そういう開発はちょっとあれでしょう」などと言う際のバイブル的なものとしてしっかりとまとめておかないといけない。すごく教科書的な感じはあるが、当たり前のことを意外と今みんなわかっていないところがあるので、これはこれでいいのかなと思う。その上で、横浜都市デザイン室が打ち出すところは、この第3章の「行動」の中にもうちょっと盛り込んでおいた方が良いという気がする。別途その部分を説明するリーフレットなどのプロモーションは必要だと思う。

○国吉委員 （都市デザインを）ずっとやってきて、やはり価値が共有されてきたのだと思う。逆に価値が共有されてきているから、都市デザイン室の先導性みたいなもののウエートが低くなってきたと思う。それぞれの局でもある程度のことはやりますよみたいなことができてきていて、だからあえて書かなくても、こういうこと（都市デザインビジョンに書いてあるようなこと）はやってきた。新たな価値を切り開くところをつくってこそ、また結びつける職場になり得るという感じがある。時代的な価値、社会の価値が変わってきている状況

の中で、いろいろな局、地域の新しい先導的な視点も発掘していくことで初めて共感を得るのではないかと思う。きちんと（都市デザインビジョンで）述べても、みんなはきちんと読んでくれないと思う。みんなと一緒に、これまでもいろいろな現場に行き、新しい価値をいろいろな地域で発掘しながら、それを実現化することを、地域の人とか局の人と模索しながらやっていく作業からでしか次の展開はできないのではないかと思う。例えば、やっぱり環境問題も考えようとか、キーワードをもうちょっと掲げて、そのキーワードと一緒に探すぐらいのことだったらまだ（市民の方々が）ついてきてもらえるか気がする。みんなと一緒にやるというだけではだめで、その時代に合った役割をみんなで見つけていくところから行動しますよと言えば、少しまだわかりやすいかなという感じがする。

○六川委員 この横浜が経験を積んできたからこういう都市デザインビジョンができるのだと思う。それはすごく意義のあることだとも思うが、（都市デザインビジョンは）あくまでも基本ビジョンで、これに運用編も一緒に入っている。だからボリュームアップしてしまい、ちょっと不明確な部分がある。基本計画なら基本ビジョンだけで良く、運用面は後でまたくっつけていけば良い。

スケッチなどはわかりやすくいいと思うが、実はこの中にいろいろな大事な言葉が出ている。例えばまちづくり協定書なども協定書と運用編を分けているように、スケッチなどもある部分だけを例として（基本ビジョンに）入れておいて、こういう運用編などがあるよということがおり込まれればいいのかと思う。

○佐々木委員 例えば第2章までで、第3章を別にするというのか。

○六川委員 そう考える。

○西村部会長 そうすると、例えば第1章、第2章は割合本当のビジョンみたいなもので、第3章と別章はもう少しその先というように分けて、都市デザイン室の市民への窓口機能や先導性など、次の戦略に向けた都市デザイン室の位置づけみたいなものを描いたほうがいいということか。

○六川委員 その部分は固まっていなくて、ある意味ファジーでいいと思う。多様性があるわけなので。

○国吉委員 多くの都市が感じる横浜の都市デザインというのは、どうしてそんなに権力を持っていないのに、地域の人、企業者なども含めて価値を共有することとか、要綱みたいなもので引っ張っていくこととかができるのかということである。一般的には行政がやっている事業というのは一方的に上から事業をやるか、制度で締めつけるかのどっちかで、何となく共有しながら引っ張ってきているというのが不思議ではないようである。それは、地域の中に入って一緒に価値をつくらうという努力もしているから、最後に支持もしてもらえるところがあるからである。その部分をきちんとと言わないと、共有とか何とかという言葉で言っている、何か非常に空中の話みたいに見えるのではないか。現場に入っていくと、現場の状況から価値と一緒に築いていくように、戦略を考えると、そういう部分を丁寧に書いておく方が良く感じる。

○西村部会長 官民とあることを、官民をつなぐような役割をやっているというような言い方をするというのか。

○佐々木委員 徹底的に協議型ということ。

○国吉委員 動いているところに行き、新しい価値を発見して、時代に合った価値や目標をつくっていくということを大事にしてやってきたというのが全体にあり、それで共有した価値をつくってきたというように書くと少しわかるのかもしれない。その現場の感じが出てこないから教科書的という感じがするのかもしれない。

○佐々木委員 日本のアーバンデザインとかまちづくりというのでは、横浜と神戸と、あと世田谷が同時期からずっとやってきている。世田谷は最初から参加でやっていくことを大切にやってきている。それに対して横浜は、こういうことをやったらどうかと提案・協議して、「ああ、やっぱりこっちのほうがいいよね」という合意を得ながらやってきている。まさにデザインの牽引力で引っ張ってきているところがある。その横浜スタイルみたいなものをずっと堅持するとか、そのためにはどういうことをやるのかとか、そういうマインドと能力

を持ったところをいろいろつくっていくとか、何かそのスタイルに対しての戦略みたいなものを考えても良いと思う。

○国吉委員 その推進母体が共同化するみたいな、ほかの局のリーダー的な部分と地域のリーダー的な部分をまとめて都市デザイン室がリードしていくとかはあるかもしれない。

○西村部会長 多分、世田谷は住宅地だから、戦略をつくってというのがやりにくいところがある。だから合意できたところがまず重要なところだという感じなのだろう。横浜の場合、都心が明確なので、戦略としてここから次にこうなってというのが非常に明確にでき、それをずっとやってきたと思う。そういう意味でいうと、例えば住宅地など、その地区の重要そうなところに出て行くときに、都市デザイン室だけでなく別の部局が中心になるような仕掛けをつくっていき、そこが先導していく。やっていることは（都市デザイン室と）同じようなスタンスで、そこが窓口になったり、引っ張ったりしていくところがあるとか、そういうことか。

○国吉委員 横浜でも地域まちづくりは頑張っている方だと思うが、商店街振興などは完全に任せてしまっている。それはかえって無責任ではないかと思う。提案しつつ向こうのニーズも見て変えていくみたいな、そういうやり方をしていけないといけない。「お金は出しますからやってください」みたいな感じでの参加型というのは、結局地域をぐちゃぐちゃにしてしまうのではないかと感じる。都市デザイン室が全部入っていくのかどうかは別として、都市デザインの活動として、提案型で入って行って連携・協働するみたいことが大事だと思う。

○綱河書記 基本的には新しく都市デザインの理念などを整理して、それを共有していくというところはこのビジョンの作成の骨子なので、そこはまとめてはいきたいと思っている。その上で、現場的な話など、どういうふうに行行政としてもやっていくかというエッセンスの部分はもう少し入れたほうが良いということだと思う。提案型でやっていくとか、それによって新しい価値を導いていくとか、これは多分第3章あたりの記述の仕方になるかと思うが、その辺のところはもう少し議論していければと思う。庁内で議論していても、都市デザイン行政という市全体で取り組むものと、都市デザイン室の取り組みとがごちゃごちゃになってしまうところはある。また、都市デザイン室が特化して取り組むようなものを書き込んでしまうと、「これは都市デザイン室がやるものでしょう」と投げられてしまうので、そういう部分は逆にあまり書かないようにしているところはある。

我々自身はどこをどうするかというところは別途考えないといけないところだが、このビジョンとしては理念などが大事だということを強調して書いている性格のものである。そうはいつても、横浜の特徴をつくってきたような提案型から地域に入ってできるというような部分をちゃんと意識するなど、まだ書き切れていない部分はあろうかと思う。そこは具体的な行動や取り組み方のところでもう少し表現できたらと思う。

○西村部会長 確かにこれは市の名前で出すわけで、都市デザイン室の名前で出すわけではないが、読む側は、横浜で都市デザインの話が出てきたら都市デザイン室が書いているのだと普通思うから、あまり都市デザイン室の色を消してしまうと、読み手の側が「何だ」という感じになるのではないかと思う。

○国吉委員 だからどこかにそのことは書いたほうが良いと思う。ここで掲げる都市デザインとは横浜市の各局、市民と一緒に作る全体的な都市デザイン活動のことをいうが、都市デザイン室の幅広い側面と、事務局として中核を担うというところが見えるような書き方をしないといけないのではないか。

○西村部会長 都市デザイン室はこの中でどこにあるのかなどと聞かれるということか。

○国吉委員 あいまいにしておくとか、結局向こうが勝手に解釈し、都市デザイン室の役割にしては幅広過ぎるみたいな感じになってしまうかもしれない。

○六川委員 市の中でどんどんと細分化されてしまっているが、都市デザイン室が各部局につながりを持ち、こういう部局を全部総合的にまとめられるような位置づけにあると本当にいいと思う。まとまりがなくなると、市民から見て「では、どこにお願いしたらいいの」という話になる。

- 西村部会長 「舵取り」という言葉が出てくるが、舵をとるのが都市デザイン室で、こぐのはいろいろな部局などというのではダメなのか。
- 綱河書記 役所の中で見るとそういう側面があるが、全体で見ると、実際に動力となって動いていくところというのは市民であったり企業であったりする。
- 西村部会長 でも、事業をやっていてお金を持っているところもあるので、行政の中で見ると、今度は都市デザイン室が舵取りになるわけだろう。
- 綱河書記 そういう構造はあるかと思う。
- 西村部会長 舵をとるのは、大きく見ると行政だが、行政の中で見るとここなのだというのがにおわされると良い。
- 綱河書記 組織的な話というのは、行政でつくるこのビジョンでどこまで書き込むべきかどうかということところは行政内の調整もある。都市デザイン室自体は幸いなことに発足からずっとこの形のまま来ているが、役所の部署はその時々でいろいろと変わっていくこともあるので、あまり特定の部署を指すような表現をしておく、機構が変わっていくようなときに逆に不都合になったりする。
- 西村部会長 でも都市デザイン的なものは守りたいだろう。
- 綱河書記 そうだが、都市デザイン室とかと書いてしまうと支障があるなと思う。
- 西村部会長 役所のセクションの名前にしないでも、都市デザイン室のような仕事をしているところなのではないかなというのが行間に読めるとかというのでもいいような気がする。
- 六川委員 余談だが、都市デザイン室が一番多いときはスタッフ人数は何人ぐらいいたのか。
- 綱河書記 多いときで15人ぐらい。2年前まで、景観チーム、屋外広告物までいたときが一番人数的には多かった。でも、それは屋外広告物の許認可をやっているチームがまた一係別にあつたので、そこも含めて都市デザインチームということとは言い切れないという気がする。
- 綱河書記 先ほど第1章から第2章と、第3章、別章というようなに、何か別にとというような話も少し出ていたが、都市デザインビジョンとしては、基本的には1冊でビジョンと考えている。第3章は「取り組み方」に触れていて、その中でも特に都市デザイン行政としてやっていくことという記述になっているので、確かにそこで違いは出ているが、冊子としては、分けてしまうとまたばらばらになってしまう。
- 西村部会長 第1、2章と第3章、別章とが何かちょっと違う次のステップだというのが、どこかに書いてあったり、表現上わかったりする工夫で良い気もする。
- 綱河書記 そこは工夫したい。
- 国吉委員 言葉の問題について、25 ページの上から2段目の「暮らししてみたいと思う都市であり、暮らし続けたいと思える」ということを代表して「親近感」と言えるのか。
- 西村部会長 親近感というと、下町っぽい雑なところだって親近感があると言えばある。そういうところを目指しているのではないか。
- 国吉委員 それから、4番目のところで「個性とまとまりが共存する、ダイナミックな都市として形成されてきました」ということを代表して「有機的」という言葉になっているが、どうか。ダイナミックに変化するというようなことだったらまだわかりやすいが、これを「有機的」として象徴する言葉でわかるか。
- 小山書記 ここは結構議論になったところである。ターゲットがだれなのかという話になると、一般の方々、市民の方々にも手にとりただけで、読んでいただけるのが一番だと思うが、そうすると直感的に何となくイメージがわくようなものが良い。「親近感」まではまだ何とかなるかなという感じがあるが「有機的」は最後まで議論になっている。ほかにマッチするものが残念ながら浮かんできかず、何かアドバイスがないかなと思う。
- 西村部会長 連関性とか、そんな感じか。「有機的」は、私の語感ではオーガニックというようになる。オーガニックというと機械的の反対語で、根が張っていくみたいに道が曲がっていて、中世的な町並みがあるというのを有機的な町並みだと言うが、そういう感覚だと

ちょっと違うかなと思う。連関的とか、相互に関係し合っているみたいなことだと思います。双方的など。

○国吉委員 言葉としては柔軟に変化していくみたいな、そういうニュアンスではないかと思う。

○西村部会長 柔軟性とか。

○六川委員 コミュニケーションということだから、柔軟、連携も良いと思う。

○西村部会長 相関とか、連携とかというような感じのイメージ。

○佐々木委員 より生命的なのだろう。秩序があらかじめオートマチックに決められているのではなくて。生態的と言ってしまおうとか。動的平衡とか、そういう感じなのだと思うが、いい言葉が見つかりそうでまだ出てこない。

○六川委員 柔軟はいいかもしれない。

○国吉委員 生き続けるとか。

○西村部会長 生命的とか。

○西村部会長 いろいろと出たが、決定打はまだない。他についてはどうか。私は「親近感」も違和感がある。親近感と言われると、親近感のあるおばちゃんみたいな、下町っぽいというのが親近感だと思う。都市の魅力があるとか、そういう感じではないと思う。

○佐々木委員 これは、自分たちでやっていくよというような、自治とか、そういうところにつながる言葉ではないか。自分自身が自分の問題としてかかわっていけるとか、多分そういう感じだろう。だから、私は「親近感」という言葉のままがいいと思っている。この表現を、自分たちの問題であるとか、関わりを持てるというような表現に少し変えていくような感じではないか。

○西村部会長 この文章を見ながら要約するとわかる気もするが、ここだけ取り上げてくると、皆さんが持っているイメージとちょっと違うかなという感じがする。

○佐々木委員 いろいろとみんなが誤解しても、誤解しつつもその誤解する方向が間違っていなければいいのではないか。いろいろと考えて、「有機的」でもいいのではないか。

○西村部会長 最終的にはこれという答えがあまりなさそうなので、ほかに何かここで議論してほしいところがあれば言ってもらいたい。

○綱河書記 最初の序文のところの網掛け内で、「都市デザイン活動の日常化」というキーワードを入れているが、これについてはどうか。

○佐々木委員 私はこれは結構考えたなと思った。今、日常こそ大変なので、悪くないと思う。ただこの網かけの中で「それぞれが」というのが、主体であるということがわかりづらくなかなと思った。それぞれに対しては物ということを最初に想起する人もいるから、これが人であるということ、主体であるということを知りやすいようにしてはどうか。

○国吉委員 日常化はニュアンスがよくわからない。「日常化」というと、何か普通のことみたいに見える。まだ「恒常化」のほうがいいのではないか。

○佐々木委員 いや、日常的ワードは21世紀において大変重要だと思う。

○綱河書記 かなり身近な言葉、普段使いの言葉に引きつけたような言い方にしている。

○六川委員 市民は「日常化」のほうがわかりやすいと思う。「恒常化」だと、また考えてしまう。

○綱河書記 市民意見募集を年が明けた2月の1カ月間に実施したいと思っている。(市民意見募集のチラシを)「都市デザインって何？」というような事例が書いてある都市デザインリーフレットと一緒に配れたらと考えている。リーフレットとセットで配り、都市デザインのPRも兼ね、「都市デザインって何？」というところで引っかかって意見が言えないというようなところを何とか脱する工夫をしたい。このセットでできるのは多分1000~2000部ぐらいのところだが、そんなかたちで配れたらと思う。

○西村部会長 それはそれでいいと思うが、これだけでも配らないといけないのでは。

○綱河書記 これだけでも配れる。意見もweb上からも出せるようにする。

○佐々木委員 いいのではないか。

○国吉委員 この意見募集をする前後に、シンポジウムをやるのか。

○**綱河書記** 今はスケッチブックについて、ワークショップ的なかたちでできたらと考えている。できればこの意見募集をやっている期間中に、まず第一弾としてワークショップみたいなものもやってみたい。

○**西村部会長** ほかのイベントでも、そのときにこれ（市民意見募集資料）を配れるとか、そういうのはないか。

○**綱河書記** 機会があれば配ろうと思うが、2月は余りイベントが多い時期ではないので、抱き合わせでやれるようなものは見つかっていない。

○**佐々木委員** 薄く書いてある「庁内関係各部署との意見交換」のところで、部局の何々課の意見を聞いたよというのを明示するのはやぶ蛇にならないか。部局の人たちは、多分内容に関してではなく、この文言はうちに関わってくるのではないかとか、そういうことで「この言葉をこう変えてくれ」とかというのが次々出てくる。それは絶対いい方向に行かない。意見を庁内で通しておかないといけないという手続はわかるが、「これで間違っているところはないよね」ぐらいの確認にしておいてはどうか。これだと承認したり、何か自分たちも関わったというふうになる。

○**西村部会長** とはいっても、横浜市が出すのだから、ほかの局がノーというものをさせないだろう。

○**綱河書記** 中津先生にお話伺った際、「いろいろなところが関与して作り上げてきたみたいだな、そういうことがどこかに表現されるといいね」、「そうすることによって、これはみんなで共有するものなのだという感じも出てくる」という意見をいただいた。多分、ここは最終的には審議経緯と審議会メンバーなどの奥付的な表現になってくると思う。今は仮で庁内の検討を載せているが、調整したいと思う。

○**西村部会長** 最終的には横浜市一体というものなので、途中経過がどうであれ、市民にとってはあまり関係ないだろう。

○**六川委員** 31 ページのこの（サッカーに例えた）ポジションは、字だけのフローにするとか、何か変えられないか。ボランチとかと言ってもわからない。

○**西村部会長** それに、この図だけ妙に具体的になっている。もう少し全体としてのトーンをそろえて、何か抽象的な絵柄で説明することはできないか。

○**説明者（野田）** この図がわからないと（全体が）わからない資料にはなっていないと思う。ただこれがあることでわかる人にはよりわかってもらえるというようなものを、例えばコラム的なものを入れるなど、ほかに補強的につけていけたらいいと思っている。

○**西村部会長** 都市デザイン室はアメリカンフットボールに全然違う人が入っているようなものではないかと思う。サッカーの図は違うのではないか。

○**説明者（野田）** このビジョン自体は庁内のためにつくっているわけではない。あくまでも市を含む都市横浜のことについて書いているビジョンである。行政が縦割りで動かないということをここに示したいのではなくて、常に流動的に動いている都市全体の中で、横浜市のポジションを広げていきたいということをいわんとしている。行政が縦割りになっている中で都市デザイン室だけぐるぐる回るということを言いたいわけではない。

○**西村部会長** 都市横浜というのは何か相手のゴールをねらうみたいなの、1つの目的を持っているということはないか。それぞれが自分の経済活動をやっているだけだから、好き勝手な方向を見ているだろう。

○**説明者（野田）** それが価値観。

○**小山書記** （サッカーの図が）主張し過ぎているところがあるかもしれない。

○**六川委員** サッカーという例が一般的でないと思う。

○**小山書記** 例えばこういう表現もありますよみたいな、コラム的に載せているのなら、そんなに違和感がないのかもしれないと思う。中でも議論があるところなので、ここは引き取らせてもらいたい。

○**佐々木委員** そうやって「これってどういうこと？」とかとみんなが言うのをねらうというのもあっていいのではないかと思う。あまり詳しくはないが、「フォワード」「ボランチ」と聞くと、何かその人の性格とか、雰囲気とか好みみたいなのがわかるのではないか。

そういう人たちも多少はいるだろう。逆に、ほかのところの例ももっと自由にいろいろと思うものを入れてみたらいいのではないかと感じる気がある。

○西村部会長 あと、(都市デザインと)まちづくりとどこが違うのかと感ずるところがある。空間にこだわった先導性がないと、かなりの部分がまちづくりと入れかえても通じそうな気がしてしまう。

○佐々木委員 最後は空間に落とし込んで何ぼということか。

○西村部会長 空間に落とし込むということは、空間のおさまりや周りとの(関係の)中での色など、プロフェッショナルとして本当に細かいところに気をつけないといけないということ。それはまちづくりとちょっと違う。そここのところのこだわりみたいなものがないと、まちづくりと変わらないのではないかと感ずられてしまう。

他の議論についてはどうか。

○説明者(野田) 今日来られていない中津先生の(事前説明の際の)意見について報告させていただく。1点は、もう既に言葉がなくなっているが、自走化は何か暴走するイメージを受けるので違うのではないかとご意見。もう1点は、他部局を巻き込んでいるのだということ表現できると重みが増すというようなご指摘。ちなみに、さっきのサッカーの図は、中津先生はむしろないほうがいいというご意見もいただいた。

○綱河書記 (今回の部会のまとめについて)大きいところでは、第1章、第2章と、第3章、別章というのは少し違いが出るような、冊子上の工夫をしていく。

○説明者(野田) 第3章に行政のボリュームが多いから、行政のようなことに触れている章に見えるかもしれないが、それぞれ取り組む人や組織が取り組み方を持つ重要性は第1章、第2章と変わらないと思う。第2章までと、第3章を完全に切り分けるようなものではないと認識している。

○佐々木委員 それでいいと思うので、何か区切りをちょっとつけたらというくらいでいいのではないか。確かに1、2、3がないと、このゼネラルな都市デザインビジョンとしてはまとまらないだろう。

○西村部会長 「取り組み方」の表題を変えるのでもいいかもしれない。第1、2章を実現するようなためにとかすると、目標手段というのが表現のできるような気がする。

○佐々木委員 章のタイトルを「実践のために」などとして、節のタイトルはこのままでいいのではないか。

○綱河書記 他に、第3章の中の記述になるかと思うが、いろいろと提案などをしながら新たな価値を発掘していく、つくり上げていくというようなことに関する記述は工夫して入れていきたい。それから、先ほども出たサッカーのフォーメーションの図は、別の形の表現で工夫していきたいと思う。あと、価値観のところ「親近感」、それから「有機的」というところでそれぞれご指摘をいただいている。「親近感」につきましては少し説明のところの補足の工夫が必要だが、「親近感」という言葉自体は良さそうだと受け取った。「有機的」についてはいくつかの言葉もいただいたが、置きかえられるものがあるかまた検討させていただきたい。あと、別章の部分のスケッチブックとかということについては特にご意見はなかったので、これをベースに進めていくということでもよろしいというように受け取った。あと、奥付に当たる最終ページのところについてもご意見をいただいたので変更をかけたと思う。

意見募集のほうのリーフレットについては、ご意見はいただいているが、特にこの最初のキャッチの部分など、お気づきの点があればお願いしたい。

○佐々木委員 (キャッチについて)良いのではないかと感ずる。

○六川委員 これで良いと思う。

○綱河書記 では、リーフレットの方もこのかたちをベースに、市民意見募集をしていく。

(2) その他

○綱河書記 今回のこのビジョンについてこの後、市民意見募集やワークショップのような

	<p>ものもやっていくと、意見がつく部分というのもあると思う。なので、内容については今日ほぼ確認できたかと思っているが、最終的にもう一度完成版に近いものでご意見を再度確認するということで進めさせていただきたい。</p> <p>また、都市美対策審議会の本会を3月下旬で調整させていただきたい。</p> <p>閉 会</p>
資 料	<p>資料1：(仮称) 横浜都市デザインビジョンについて</p> <p>資料2：第9回横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録</p>
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本日の議事録については、部会長が確認する。 ・ 次回の開催は平成27年3月10日とする。